

COSMOS集



靴下で踏む

泉

「あすなる集」特選
陽太郎*東京

まつしろな小箱のなかで細々と電話がなつてだあれも出ない
欲しかったまさにそのもの見つかつて百円シヨップでかみころす笑い
齒車はゆつくりまわり名も知らぬ黄色い穀物をすりつぶす
雪深い山脈を見下ろしながら靴下で踏む飛行機の床
若書きの詩を埋葬しその土はにわかに湿り気をおびてゆく

G ペン

押火 美奈子 千葉

苦しみし三十余年を知る人はみな我に言ふ「おしあわせに」と
透明な立方体の中鳥人間スリッパを蹴る「孤独」といふ絵
二十一歳で描きしこの絵をGペンでペン画にせむと悪戦苦闘
「うつむいて」「すてばちな足に」「猫背にする」注意メモ添へペン画描きゆく
町に出て髪切りしのみでフラフラの体力なき身に何故歌出で来

野良の時代

栗山 貴 臣*福岡

風呂蓋で寝そべる猫と目を合わす一人芝居のにらめっこをして

抱えれば一分経たず目を閉じる野良の時代を過ごした猫が
太ももに体を添わせ寝る猫の喉鳴る音がついと途絶える
ジェット機の音だけ聞いて二時間を過ごせば見える福岡の街
幾つかの街灯見える位置に立ち自分の影の所在確かむ

三次 盆地

樋口 八重美*広島

自撮りしたわたしの顔は引力に負けていました 六十四歳
寄付をした人の名前の刻まれる石碑の中に亡き父がいた
妹のためにつくつたおせちには妣のレシピのすべてをつめる
雲ひくく三次盆地をおおう朝はつ日が天使のかいだんおろす
クイックルワイパー初めて使つた日十年分のほこりが取れた

光で撫でる

大久保 ますみ 鹿児島

かたまりて土手のつばなは日に遊ぶ幼日の吾もそこに立たせて
剪定を了へし蘇鉄がヒーローとなりて位置占む庭の真中に
待ち待ちし初日は昇りこのわれの身のくまぐまを光で撫でる
向き変へて機体は動き飛び立てる瞬時に太く息をするなり
飛行機といふ大鳥の腹にゐて大空を翔び下界見下ろす

くれなゐの花心

一ノ宮 陽子 鳥取

くれなゐの花心にいまだ残りある朝の闇あり寒椿の花
はつ春のひかりきらめき自らを解き放つごと敷椿落つ
つなぎたるてのひら君のポケットに入れてみぞれの降る街をゆく
泣き虫の男の子がわれを呼ぶ声のする木枯の吹きすさぶなか
四十を越えし息子が母われを諫めくれたりみぞれ降る夜

新年祭り 中島 涼 高知

お手製の注連縄の色新しく氏子らつどふ新年祭り
太鼓鳴る祭りのごとく煙火あがり落ち鮎魚のはじまる師走
冬の川に捕りし錆び鮎百匹がもらひ手のなく天日に干さる
玄関に「ごめんせえ」と言ふごとく古い蟬螂の入り来たりけり
酒店の消ゆるわが地区その昔檜屋たばこ屋豆腐屋ありき

小さなわたし 森本 順 子*兵庫

救急車と犬の遠吠え聞きながらゆっくり歩むこの星月夜
光年をかけて降りくる星々を見ている小さな小さなわたし
星空はすっぱりわれを包みこみ夜の静寂に悩みうすらぐ
キラキラ星を素直に歌った幼稚園破れたくつ下寒くはなかつた
見せかけの若さ作りも大事だが中味の若さがやっぱり一番

泡の春色 中村 京 兵庫

笹竹がさはさはさは音をたて平成、令和の煤はらひゆく
とつときの〈あきたこまち〉をどんと搗き帰省子たちの胃袋みたす
梅の木に紋付鳥のすがたなく寝正月などしてはをらぬか
みたり子に侘びさびあらず茶筌ふりお薄の泡の春色きそふ
凍て空の青さにまさる火立ちなりアラジンストープまだまだ現役

杉の大樹 高山 幸 子*三重

わたり鳥大夕焼をひわひわと隊列替えつつ点描となる
立冬の畑に胡瓜五本もぐ暖かな冬を心配しつつ
冬空にチェーンソーの音ひびきいる夫が山にて櫓木伐りおり

風を切り風を引きつれ大クヌギ冬空かたむけ倒れてゆけり
からまれる藤蔓はげば太息吐きだすごとし杉の大樹は

昼と夜の数 池上 昌 子 東京

元旦の陽がたらぬけり継目なくみどりに澄める運河の面を
ゆるやかなカーブの橋はゆきかへる運河の船の水路みおろす
八枚の喪中葉書が届くわれにどれほどのこる昼と夜の数
一輪車とスマホの人がすれちがふ暮れの賑はひなき商店街
水底に何ひそめるや暗き水に溶けつつしづむ水鳥三羽

地団駄 風間 孝 子 新潟

雪国に雪の降らぬは楽なれど構ふ井桁の緩む心地す
栃ノ心の胸腹高く抱へられ炎鵬は宙に地団駄踏み
マラリアで逝きたる父は今いづこ七十余年の歳月は過ぐ
フランス語で私の夢といふ「モン・レーブ」小さき茶房に歌友と語れり
大寒と言へど雪無き冬ざれの庭に赤芽の猫柳吹く

ナビの夫 尾形 久 子 群馬

「曲がらずにまっすぐこのまま」誘導する夫は返納後ナビに変身
助手席にナビをつとめる夫の目はわき見するわれを瞬時にとらふ
買ふか否か迷ひかかへて帰りたり試着のコートは好みのキヤメル
こぼれ種の生えて咲きしペチュニアの白さ生き生き陸月のなかば
さや振ればからからからと音聞こゆオクラの種の熟したる音

しまひ湯 甘利 紀 子 長野

サプライズ餅掲ぎ終へたわがために夫はピザなど買ひ来てくれぬ

袖浮かべ何とも楽しい気分にて浸り過ぎたり冬至のしまひ湯
物忘れ年相応と慰むる夫は吾より五歳年上

母の日のカーネーションが赤あかといまだ咲き継ぐ新年迎へて
暖冬のことしは正月早々に親指大の露の臺取る

パ ッ ク 餅 角 田 敏 郎 * 神奈川

朝焼けのビル街遠く見渡せば静もりいたり影絵のごとく

錆色の文学全集古書店に並ぶを見掛け父の書棚おもう
みかんの皮たたみつつ「ごちそうさま」言う朝食後の決まり文句を

年末にのし餅を切る私の仕事も今はなくなるパック餅買いて
戦後すぐ大病やむもペニシリンに救われし母百歳こえて生く

魚 増 や さ む 藤 本 勝 子 兵 庫

期末テスト終へて観たりき「赤い靴」「エデンの東」われの青春

眉が濃い服装が変といふ孫よ無関心よりうれしく思ふ
日々ちやんとせねばと戒め過ごししがポカする事のおほき八十

オメガ3^{スリー}八十の吾はもうよろし子や孫のため魚増やさむ
寒に入りさむくはあらず如何にせむ切り干し作る寒風よ吹け

幽 霊 船 工 藤 亜希子 * 神奈川

霜夜には真白き繭をつむぎたし静かに一人こもりていたし

やわらかく濃き闇匂うふるさとの母の隣で迎える夜は
どれがいい? 示す写真の二、三葉 遺影候補と母は言うなり

幽霊船現るごとし汐留の水雨に煙る高層ビル群
葉裏よりまいまい剝すようにして何かをひとつ諦めた冬

マトリョーシカの一箱内にあることし打ち解けがたき人たちといて

朝のあいさつ 森 下 た み * 埼玉

おじいちゃんを亡くした伸くん空をさし天国へ行ったとあつからかん
メジロ二羽庭木によれば主のごとヒヨ高鳴きて追い払いおり
向うから朝のあいさつこれは又何か良きことあつたのだらう
二階近く伸びしピラカンサ九十の夫と枝切る足場おさえつ
北風につい飛びこんだデバ地下に遠き故郷の物産展あり

年のはじめに 重 永 栄 子 福岡

うとうとと炬燵に穏し晴れの日をガラス戸おほひ烏かすむる
新しき年のはじめに願ふこと身体うごけよ脳うごけよ

冬の陽にはんやり居ればうかび来るぶくりと出た短歌ぶくりと沈む
更けし夜を眠りは来ずに思ひをり喪中ハガキに断たれし行き交ひ
暑き日は暑さで死にさう寒き日は寒さで死にさう八十四になる

歌 の 神 様 渡 辺 京 子 宮崎

補聴器の働きわるく歌会に居心地わるいか無口なる夫

小走りに追ひつくことはもうできぬ 夫よときには振り返るべし
「ふたりして百八十になりました」詠みたる歌の入選とどく

NHK全国短歌大会に上京の機たまふ歌の神様

おしやべりを吾に聞かれて照れたらし二羽の小雀ぱつと飛びたつ

冬 至 の 南 瓜 岩 崎 たけ子 福岡

鎮もりし宮居の森よりこだまして令和二年の初太鼓鳴る

会ひ得ざるままにいつしか遠離かる縁を賀状はしかと運び来
晦日夜の闇を背負ひてそれぞれは今年消すがに除夜の鐘撞く

ぼうぶらと祖母の言ひしもなつかしく冬至の南瓜に庖丁入るる
うしほ汁いまひとふりを迷ふ塩一息つきて思ひとどまる

地に還る 島 夏 樹*宮城

冬と春の間に燃えて灰となりひっそり果てた名もない草たち
廃線は墓夏草がかくす墓錆びた昔がしずかに眠る

うつつしい重石のようだ「令和」には和の上いつも令が居座る
追い討ちに似て違うのだ変り果てた気候伝える台風だった
身を捨てて時来た葉たちつつましく地に還りゆくひとつひとつが

微細なぬり糸 五十嵐 道子 石川

不安ごといくつかあれどネガティブにならずに生きむ初菌みがきす



「その二集」特選

菅の園 高野 哲司 兵庫

実も枝も葉の両面も毛が多し堀のすきまのアワジイヌビウ

モエギスゲ、クロカワズスゲ、ヤワラスゲ菅の園なり明石公園
双眼鏡でクロマツ森を拡大すマツグミの実はほのかに紅し

希少種のハチジョウススキ採集し浪音きこゆ中八木の駅
いづこより移り来たるやアオイゴケ故郷へはカロライナといふ

卒寿越えいささか根がなくなりて微細なぬり糸の運筆鈍る
デイサービス週に三日は通ひたし足の弱れど健やかなるわれ
雑用に追はれて早も月半ば今年最初の漢検近づく
「枸杞」『醫書』誌書に見しこの字漢検に出んかと思ひメモをしておく

ふんはり 大沢 律子 岐阜

市の予算漸くこの地によせられて堰堤工事のダンブ行き交ふ
西洋のたんぼぼの綿毛ふんはり荒れ地に小さきぼんぼり点す
対向車のライトがわが眼に四個見え老いは危ふし目からやつてくる
パン焼きて庭のブルーベリーのジャムをぬり冬もりのやうな朝餉を済ます
元日の禪寺浄し僧の弾くチェロのひびきの御堂にながれて
百円の草刈鎌の手に軽く仕事始めの笹刈りたのし

〈の〉と〈め〉 富永 恵美子*東京

手のサイズほどのツリーを飾りたり雪なき首都のひとつの窓辺
〈の〉と〈め〉つて育つと多分〈お〉と〈あ〉でしょ、伸びた先から空が咲くかも
短歌用神経回路を構築中 言葉は言葉求めて走る
洗濯機の前に正座で向き合えり故障の原因告げいる人と
友人を心配するふり本当は私が誰かの声聞きたくて

あたためる声 中村 恵*鳥取

熱籠もる布団から出す爪先を壁につければ泉をおも
う 昼しゆうを二度寝うたた寝したあとでやと読んだり笑つたりする
残業の夫を明るく迎えんと夜の十時にあたためる声

年末の小雨の夜をトラツクのランプが揺れて瞬いており

到着口に流れる(きよしこの夜)を聞いただれかの遠き口笛

子育て話 松井 奏*茨城

公園のジャングルジムを登ってるぼくの弟にこにこ笑う
冬休みあけて学校始まつただけけど心はまだ冬休み

おしやれだな高級感のあるお皿よく見てみるとプラスチック製
ガチャガチャで出てきたカエルキラキラと曙光らせ湯船に浸かる
え!ここが?こは取れちやあだめでしょうペンのキャップの部品外れた
なんかさあ困つちやうねえこの暮らし母とお風呂で子育て話

柚子の実 内藤 文子 福井

亡き父の植ゑし柚子の木二三つ木守り柚子の実しづかに点す
柚子の実を絞るときめき香る夜は厨にそつと月が来てゐる

しんしんと月のひかりを浴びるとき薄氷のごと聖夜はじまる

雪国に生まれしゆゑか幼きに見し月夜にも雪ふりしきる

冬帽子いくつもそろへ寒迎ふ北陸に住むわれのときめき

氷河期に生まれし鳥よ雷鳥は立山の雪にくるまり眠る

寒 稽 古 多 田 美慧子*宮城

会えばまた「よいお年を」と繰り返し歳晩の日々はなごやかに過ぐ

ワッショイの掛け声高く寒稽古の子供ら走る賀茂神社まで
津々浦々日の出の時刻をラジオにて聞くは楽しみ また明日が来る

「迷つたら枕詞を入れてごらん」思いもかけぬアドバイス受く
みちのくの胡麻かりんとうバリポリと噛み応えありこの二十年

リセ ッ ト 大 原 真 路*香川

夕暮れのあかり受けたる橋梁を残して海ははや眠りゆく
大型のバイクのような音のしてオスブレイの訓練窓枠揺れる
さつぱりと洗い流してリセツトす明日は晴れなり怒り忘れよ
文化祭の先生に誘われてわが篠笛に「竹の唄」吹く
わが娘はガラスのような性質なればひとりいいか四十一となる

むかごの始末 野 村 千代子*愛 媛

熱々の七草がゆの芹青し二日遅れでひとり煮る朝

亡き姉に貰いし土鍋で粥を炊く元気な頃の声聞こえくる

「お正月」孫の書き初め取り囲み筆あと褒める大人三人

冷蔵庫隅に忘れて二か月のむかごの始末まだ決めかねる

新年の意気込み記す余裕なく十日過ぎれど白紙の日記

母 の 恋 文 酒 井 恵 子*長 崎

(五十パーセントOFF)という貼り紙に吸い寄せられてセーター二枚

小春日をゆっさゆっさどこへ行くお産間近か薄茶の猫は

小春日の整形外科の玄関は患者の靴が押し合っており

除夜の鐘を騒音という人もあり幼き頃の行列なつかし

父母の墓所の石碑に詠まれしは来世を誓う母の恋文

飾り切り 山口育子*東京

母はまる義母はしかくの雑煮餅我が家はしかく夫のこのみで
丸餅に白みそじたて三つ葉いれ母の雑煮ははんなりあまい
塗椀に重箱・屠蘇器かわかして箱におさめて正月おわる
お煮しめの花にんじんの飾り切り孫と並んで包丁つかう
様々な色や形のマスクして目だけ見えてる顔の個性化

駅伝ランナー 樺 かな乃 広島

先頭を行く候鳥の心意気伝ひくるなり駅伝ランナー
はつたい粉・葛湯・水あめ・金平糖の全盛期なるわが幼年期
だからと恨み節など聞こえる墓の辺りの落椿より
霊園の丘よりのぞむ呉湾に初日のさして黙す護衛艦
墓場までひた走りゆくわれのこと付かず離れず娘の見守りぬ

坊主頭 丸山克介 鹿児島

山風の止みて湖面の動き出す一羽二羽三羽鳩の潜けりかづ
小指より小さき鉛筆使ひるる未だ戦後の暮しの抜けず



宅配便両手に抱へ走り行く男は師走の路地の奥へと
英和辞典開きしままに居眠りする坊主頭を市電の揺らす
爺一人若者二人座して待つ松の内の夜のコインランドリー

泡立草の黄 糸田 富美代 兵庫

枯れ色の線路の土手のひところ泡立草の黄にそまったり
錦には見えねど昆陽こんやうの川面そめ柿と桜のみぢ葉ながる
田水とる井堰なくなり甲羅干ししてゐし亀の家族見られず
カーテンの寸法直し頼まれて正月前の臨時収入
半分に割りて湯船に浮かべたる柚子のかをりにしばし目を閉つ

納豆おろし餅 渡辺 幸子*福島

締め切りを控えて苦吟する我に茶釜たぎりて頑張れと言う
如月の雨に庭土潤いてはこべの緑は色を増し来る
田に憩う白鳥見んと老一人動かず立ちて鳥も騒がず
杵音も聞かず冷凍の餅を焼き一人雑煮で祝う元旦
黄粉餅あん餅納豆おろし餅子等の競いし頃の懐かし

ゆめは百歳 地庵 道子 和歌山

いち年の収支決算記入終へひとり暮しの家計簿とちる
雲海に雪をかつぎし富士の山茜にそめて初日のほり来
今日われの八十路最後の誕生日ゆめは百歳生きて居たいね
使ひ捨てカイロの様になるのかな私が何も出来なくなれば
迷ひつつ投函したる詠草はポストにことんと呆気なく落つ